第三学年・卒業論文発表会実践報告

小　泉　尚　子（第三学年主任・国語科）

Ⅰ．はじめに

2004年度に国語科で「卒業論文」（6000字以上の論文）執筆制度を導入して20年近くになろうとしている。この成果を発表する場として現在定着しているのが、2月中旬以降に行う「PBL発表会」（2014年度より1・2年生を対象にLHR内で実施）と「中央大学附属学校研究発表会」（2015年度に中大附属高校と合同で「卒業論文発表会」として実施、2016年度より「中央大学附属4校研究発表会」として中大高校、中大横浜中高も加わり4校で実施、現在の名称に至る）である。「PBL発表会」では優秀論文執筆者の中から代表生徒2〜4名が選ばれ発表、「中央大学附属学校研究発表会」は代表生徒1名が選ばれ発表している。

このように、完成した卒業論文を披露する機会としては、ごく限られた生徒が登壇し、下級生もしくは外部の人達に向けて卒論を紹介する会が実施されているのみだった。今年度（2022年度）の新入生から新カリキュラムが導入され、探究的・主体的・対話的な学びがより重視されるようになった今、3年次の学習の集大成的な行事として、全員が卒業論文の内容を発表し合えるような機会を設けてもよいのではと考え、「卒業論文発表会」を企画し、2023年1月11日（水）に学年行事として実施した。

Ⅱ　発表形式

実施日は2年生が3泊4日の研修旅行（関西方面）に行っている期間の初日に設定した。この4日間、1年生は「探究Action week」と称し、フィールドワークの事前事後学習と実地研修を行っている。学校全体が探究的な学びを実施している空気が醸成されるなか、3年生も通常授業ではなく今まで取り組んできた卒業論文のアウトプットができたこと、また発表会の会場として2年生の教室も使用することができたことはとても良かったと思う。

3年生は、以下のように特別時程を組んだ。

9：20～ 9：30	SHR（出欠確認）、教室移動
9：30～10：30	グループ内発表（ランダムに班になり、各教室で全員が班ごとに発表）
10：40～11：40	分科会での発表（テーマ別に分かれた各教室で、代表4名が発表）
12：00～13：00	全体での発表（第一体育館に集まり、学年の代表3名が発表）

（※午後は第一体育館にて、翌日の卒業記念行事〔日帰り遠足〕の説明を行い解散）

時限が進むにつれて発表者が少数に絞られ、聴衆が増えていく形式にした。また、分科会での発表および全体での発表では、本校の卒業生（大学生）をゲストに迎え、コメントをしてもらった。

さらに、あらかじめ生徒には自分の卒論がどのジャンルに属するかを以下の項目から3つまで選ばせておいた。

①観光　②法律・法学　③AI・エンタメ　④スポーツ　⑤メディア分析
⑥医療・社会福祉　⑦地方創生　⑧教育　⑨企業のあり方　⑩行政の課題
⑪社会的弱者を作らないために　⑫作品分析
⑬異文化理解・多様性を考える　⑭環境対策、エコロジー

これらの項目は今年度の3年生の卒業論文の題目を見て、これらに大別でき

るであろうと見込み設けたものである。

（1）グループ内発表

まずは9クラスの生徒を同じ出席番号順に並べて表を作り（1～9組の1番×9名、2番×9名、3番×9名…というように）、表の上から4名で1班になるようにグループ番号を振った。朝の出欠確認後、座席を4名ごとの班の形にし、机上にグループ番号を書いた紙を載せ、その後、各自が移動しそれぞれのグループ番号の席に座った。同じクラスの生徒が同じ班になることはなく（※【表1】参照）、ここで4名全員が初対面、という組み合わせもあった。生徒はこの日のために作成した卒論紹介用スライドを印刷して持参し、1人あたり10分（卒論の内容紹介7分、質疑応答や感想3分）の発表を行った。

【表1】グループ発表の班分け

班	組	番号	卒論タイトル	サブタイトル	ジャンル
1	1	1	空き家による地方創生	他事業と空き家の相互活用	地方創生
	2	1	日常に潜む悪意のない差別	『ハリー・ポッター』論	作品分析
	3	1	動物実験代替法の利用促進	資生堂・花王の取り組みから	企業のあり方
	4	1	高校生におけるネットいじめの解決を目指して	学校、企業と家庭の関わり方から考える	教育
2	5	1	視覚言語としての色彩	フィギュアスケートの衣装に着目して	異文化理解、多様性を考える
	6	1	ワーキングプアから考える日本の教職の雇用問題	非正規教員の現状改善を目指して	教育
	7	1	盲導犬不足の現状と解決策	行政の取り組みから考える	医療、社会福祉
	8	1	読書感想文コンクールの課題図書の変遷	戦争の伝え方	メディア分析

※ジャンルができるだけ被らないよう所々調整したので、実際は全ての班で出席番号が同じ者同士になるとは限らない。

グループ発表の様子

（2）分科会での発表

次に、分科会形式で発表を行った。ジャンルごとに一つの教室に集まり、教室内で代表生徒4名がプロジェクターを使用し、卒業論文を発表した。各教室に本校卒業生（大学２～4年生、計16名）がコメンテーターとして1人ずつ付き、質疑やアドバイスを行った。この時限は、生徒の中から司会を立て、以下のペースで進行させた。

10：40～10：45　大学生自己紹介（5分）
10：47～10：57　発表①（発表7分＋質疑・コメント3分）
10：59～11：09　発表②（発表7分＋質疑・コメント3分）
11：11～11：21　発表③（発表7分＋質疑・コメント3分）
11：23～11：33　発表③（発表7分＋質疑・コメント3分）
11：34～11：40　大学生まとめ（6分）

振り分けは以下の通りに行い、各代表生徒が発表を行った。

〔3年1組会場・12名〕テーマ：観光

コメンテーター：中央大学商学部3年　加藤早紀さん（55期）

発表者①3組男子「理想の水族館を目指して―エンターテイメント性と教育の側面から―」

発表者②3組女子「愛・地球博と大阪万博―環境デザインから見る成功のわけ―」

発表者③4組女子「地域振興におけるスポーツツーリズムの有効性―地域スポーツの現状から考える―」

発表者④7組女子「食品表示の課題と展望―ピクトグラムを活用した食品表示の提案―」

〔3年2組会場・12名〕テーマ：法律・法学

コメンテーター：中央大学法学部3年　清水亜由美さん（55期）

発表者①2組男子「中学校における法教育の展望―昔話を用いた模擬裁判教育―」

発表者②3組女子「ステルスマーケティングにおける法規制―消費者と企業の視点からの考察―」

発表者③4組女子「女性が生きやすい社会のために―『母親になって後悔してる』で語られた本音―」

発表者④７組男子「日本の移民受入体制の課題―入国管理体制の変化がもたらす多文化共生社会の形成―」

〔3年3組会場・17名〕テーマ：ＡＩ・エンタメ

コメンテーター：中央大学国際情報学部4年　下田泰誠さん（54期）

発表者①1組男子「ボーカロイドから考える流行の条件―インターネット・ファッドと二次創作―」

発表者②2組女子「『ポケットモンスター』論―ゲームおよびアニメに表れる男女の在り方―」

発表者③4組男子「平和教育―VRで紡ぐ戦争の記憶―」

発表者④7組女子「LIVEエンターテイメントの現状と展望―「推し」を"推し"続けるためには―」

〔3年4組会場・16名〕テーマ：スポーツ

コメンテーター：中央大学国際情報学部3年　冨島悠介さん（55期）

発表者①1組男子「TOKYO23FCのクラブ経営―地域共生と街づくりの観点から―」

発表者②1組女子「スポーツボランティアの促進―有償のボランティア活動―」

発表者③4組女子「日本バレエの課題―日本バレエの教育方針を統一するための取り組み―」

発表者④7組男子「高校野球報道の是非―21世紀枠による出場校と強豪校の報じ方の違いから見る―」

〔3年5組会場・22名〕テーマ：メディア分析

コメンテーター：中央大学総合政策学部3年　成實陽菜さん（55期）

発表者①3組女子「情報に惑わされないために―メディアリテラシーの必要性と定着―」

発表者②5組女子「日本語における一人称代名詞の特徴―『日本国語大辞典』から―」

発表者③7組女子「痩身至上主義に陥らないために―美の追求と健康のバランス―」

発表者④8組女子「朝日新聞『声』欄に見る幸せの構成要素―持続性のある幸せ―」

〔3年6組会場・19名〕テーマ：医療・社会福祉

コメンテーター：中央大学総合政策学部4年　遠藤あみさん（54期）

発表者①2組男子「障がい児保育における地域連携の必要性―地方自治体の取り組みから考える―」

発表者②3組女子「介護業界における人員不足―群馬県と宮城県の事例から

これからの介護を考える―」

発表者③4組女子「沖縄県の長寿崩壊―沖縄県が歩んだアメリカ統治と家族形態の変化から考える―」

発表者④7組男子「コミュニティ音楽療法とその福祉機能―NPO法人音の風の活動を通して―」

〔3年7組会場・23名〕テーマ：地方創生

コメンテーター：中央大学法学部3年　手塚咲来さん（55期）

発表者①1組男子「『まちやど』による地方創生―物理的空間の再構成と経済的成長の観点による分析―」

発表者②7組女子「"強い店"とは―『集積の利益』の観点から下北沢商店街の事例を分析する―」

発表者③8組男子「消防団員の減少と将来―より良い対策と効率化を考える―」

発表者④9組女子「杉並区のふるさと納税―『顔のある犠牲者効果』を利用する―」

〔3年8組会場・18名〕テーマ：教育①（主に学習指導法）

コメンテーター：埼玉大学教育学部3年　菊田詩織さん（55期）

発表者①1組女子「食育のあり方―五泉市の取り組みに見る食育―」

発表者②2組男子「小中学生への防災教育のあり方―『面白い』防災教育―」

発表者③5組女子「中学校における『書』の教育の変遷―学習指導要領から考える―」

発表者④5組男子「小学校教育における飼育動物の課題―飼育動物の必要性と現状―」

〔3年9組会場・18名〕テーマ：教育②（主に教育行政）

コメンテーター：中央大学文学部2年　鈴木萌絵さん（56期）

発表者①1組女子「教員研修における総合的な人間力向上と効果的な実施について―秋田県と福井県の教員研修から考察―」

発表者②2組女子「中1ギャップ解消のために―ピアジェの発達理論に即した環境適応を目指して―」

発表者③7組女子「低学年向けの不登校対策―SSWの効果から見る身近な存在の重要性―」

発表者④8組女子「スポーツ推薦入学者のための学習支援とキャリア形成支援―大学の取り組みから見る適切な支援とは―」

〔2年4組会場・18名〕テーマ：企業のあり方

コメンテーター：中央大学商学部3年　姫野愛実さん（55期）

発表者①2組女子「モノガタリ消費論から考える劇場経営―『コト消費』とそれを促す価値について―」

発表者②3組女子「ゆるキャラ研究―ブランドビルディングブロックから考える人の心を惹くブランド力―」

発表者③4組女子「ラグジュアリーブランドの価値創造―エルメスの企業戦略からの分析―」

発表者④5組男子「二大ハンバーガーチェーンと近接する駅の傾向―出店戦略と棲み分けの工夫―」

〔2年5組会場・18名〕テーマ：行政の課題

コメンテーター：中央大学法学部4年　山崎理咲子さん（54期）

発表者①3組男子「公共交通機関と都市誘導によるコンパクトシティ政策の推進―熊本市の施策を分析対象として―」

発表者②6組女子「津波避難―東日本大震災の教訓から考える―」

発表者③6組女子「地域児童館での中高生の居場所づくり
—ハードとソフトの両面から—」
発表者④7組女子「文化財保護のためにできること
—クラウドファウンディングに見出す新たな可能性—」

〔2年6組会場・18名〕テーマ：社会的弱者を作らないために
コメンテーター：中央大学法学部2年　小林彩未さん（56期）

発表者①2組女子「教育格差を解決するには—二団体の取り組みから見る
連携の重要性—」
発表者②4組女子「高齢者就労支援の現状と分析—行政と民間の視点から
日米を比較して考える—」
発表者③8組男子「労働者に対する待遇を平等にするための雇用形態
—安定した労働環境を求めて—」
発表者④8組男子「ホームレスの就業支援—主体性を重視した押し付けない
支援策—」

〔2年7組会場・22名〕テーマ：歴史研究・作品分析①
コメンテーター：中央大学国際経営学部2年　宮原志歩子さん（56期）

発表者①2組女子「『海道記』論—自然描写が映し出す孤独と人生の
はかなさ—」
発表者②3組男子「近衛文麿元首相別邸荻外荘の変遷—山県有朋旧邸との
比較—」
発表者③6組女子「『ロレンゾ』論—怒りと嫉妬の観点から見る—」
発表者④7組女子「綿矢りさ『亜美ちゃんは美人』論—アイデンティティ
の形成と語り—」

〔2年8組会場・22名〕テーマ：作品分析②

コメンテーター：中央大学文学部3年　青木文哉さん（55期）

発表者①1組女子「『サザエさん』の受容のされ方―視聴者の階層帰属意識の変化―」

発表者②2組女子「岸本斉史『NARUTO―ナルト―』論―サスケにとってのつながりとは―」

発表者③3組女子「『ピグマリオン』論―成功物語が演ずる喜劇の実体―」

発表者④4組女子「『Anne of Green Gables』論―主人公の象徴である赤毛の意義―」

〔多目的教室２会場・21名〕テーマ：異文化理解・多様性社会を考える

コメンテーター：中央大学総合政策学部2年　萩生田梨央さん（56期）

発表者①3組男子「ソフィアンズコンテスト論―ジェンダーと多様性の観点から―」

発表者②6組男子「子どもの発達障碍に気づくために―保護者と保育士の連携の必要性―」

発表者③7組女子「多数派少数派の区別をなくす多様性教育―ヘテロセクシズムを排除した『誰も置き去りにしない』社会のあり方―」

発表者④9組女子「性同一性障害による戸籍の性別変更の課題―多様化する家族のあり方から考える―」

〔多目的教室４会場・14名〕テーマ：環境保全・エコロジー

コメンテーター：電気通信大学情報理工学域一類2年　前田煌さん（56期）

発表者①３組女子「佰食屋が持続可能な飲食店となった訳―食品ロスとワークライフバランスの取り組みに見るCSV経営―」

発表者②6組女子「コスメから考える環境問題―美しさと地球どちらも

大切に―」

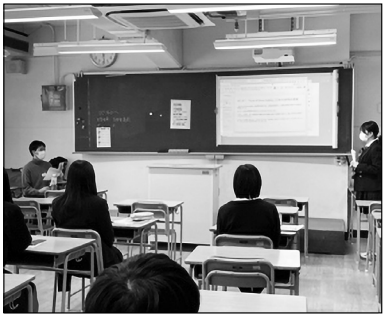
発表者③6組女子「キャンプ場のあり方―ゴミ問題から考える―」

発表者④9組女子「エシカルごみ供給の動機付け方程式

―上勝町がゼロウェイストを実現できた理由―」

生徒の発表後は、大学生が現在行っている研究内容やゼミの活動内容についても紹介してくれる等、大学生の取り組みについても知れるひとときとなった。

分科会発表の様子



（3）全体での発表

最後は第一体育館に集まり、優秀論文として選ばれた3名の発表を皆で聴いた。発表者は以下の通りである。

発表者①3組女子「『ズートピア』論―アイデンティティ・ポリティクス

とコミュニケーションスタイルから―」

発表者②7組女子「国際理解教育の学習指導法―絵本を使用した新たな

学習指導法の提案―」

発表者③1組女子「臓器移植の啓発活動―行動変容ステージモデルと

ナッジの観点から―」

1人あたりの持ち時間を20分〔各卒論紹介10分＋質疑応答10分〕×3名とし、大舘教諭の司会・進行で全体での発表会が行われた。ゲストの大学生にも引き

続き参会をお願いし、質疑応答を盛り上げてもらった。大学生からの質問は、ときに専門的な用語を入れながら多角的な視点から彼女達の論文の内容を掘り下げてくれるものばかりで、答える本人だけでなく、聞いている生徒全員にとって大変刺激になったことと思う。フロアの生徒からも積極的に手が挙がり質問が出され、仲間の卒業論文に深い関心を寄せていることが伺えた機会となった。

全体発表の様子

Ⅲ　生徒の感想

初めての企画で数々準備不足のことはあったけれども、終了後の生徒の感想は、頗る好評であった。以下、感想を項目ごとに抜粋する。

【グループ内発表に対して】

① 同じ班の人全員にどうしてそのテーマを選んだのかを聞いたのだが、「ニュースで見た」「元々テーマを深掘りしていたらたまたま見つけた」「身近な問題の根本を辿って選んだ」など、色々あって興味深かった。皆、全然違う分野で面白い発表だった。

② 自分の発表では考えたことを自分なりに一生懸命伝えることができました。前日からずっとうまく発表できるか不安でとても緊張していましたが、図やイラストを使って文章のみの時よりも分かりやすく伝えることが出来たと思

います。他のクラスの人とも交流することができ、新たな考えに触れることができました。

③　発表の際、自分の原稿（卒論の完成稿）の内容をしっかり把握していないと厳しいなと思いながら発表しました。7分は最初、長いと感じていましたが発表してみると案外あっという間でした。他人の発表を聞くのも、各々の着眼点が面白くて楽しい時間でした。

【分科会での発表に対して】

①　自分の論文と比べ物にならないくらいひとつの事柄について深掘りしていて、どれも聴きごたえがあった。

②　初めて他のクラスの人の論文を聞けて楽しかったです。特に同じ分野について書いた人の論文は、自分が知っていたり興味を持っていたりした対象について、面白い視点から分析していることが多く、惹かれました。

③　選ばれている人の論文を聞き、自分の論文よりも根拠と結論の繋がりが鮮明になっていた。また、自分の論文に足りないところや、直すべきところに気づいた。

④　発表者としては質疑応答や感想を述べていただいた際に、こういう見方でも考察できたんだという新たな発見や、自分では気づけなかったまだ残されている課題について知ることができとても新鮮だった。

【全体での発表に対して】

①　特にズートピアを調べたものが面白かった。英単語のニュアンスの違いでポジティブネガティブを調べる方法を見て（自分も英語特有のギャグを見逃したくないという思いからできるだけ英語で映画を観ているから）私も他の作品のそのような点に気づきたいと思った。

②　国際理解教育の論文が記憶に残っています。同じクラスなので中間発表は聞いていたのですが、その時よりもより深く調べて教育にどう活かすかなども論じていて、自分の考察と意見が伝わってきました。自分で指導法について考えることは、私にとっては難しいことなので凄いと思いました。

③　心臓移植については私も関心がある題材だったので、真剣に聞くことが出来ました。あるひとつの答えに誘導させるためのナッジは非常に強力な手段であって、それを用いることは難しいということ、しかしナッジに当てはめていくことで啓発活動の効果が明らかになる、という分析が明確に示されていてわかりやすかったです。

④　体育館での発表を聞いて、調べている量や時間が全く自分とは違っていて、質疑応答のレベルもすごく高く、ほんとに同じ授業を受けて卒論を書いたのかと感じるレベルで驚きました。今回の発表を通して、分かりやすくまとめるにはどうしたらいいのか、上のレベルの人がどこまでのクオリティで作り上げたのかということが知れてよかったです。

⑤　3人ともとても分かりやすく丁寧な発表で、もっと聞いていたいなと思いました。とても驚いたのは質疑応答で素早くかつ的確に対応できたことです。質問に答えられるというのは基礎知識や自分の考えをしっかりと持ち、多くの試行錯誤をしてきた証拠だと思います。大学生の方たちが疑問に思った点などを聞くことで、論文などの聞き方も学べたような気がします。

【ゲストの大学生に対して】

①　大学生の方からアドバイスをいただけて、とても参考になりました。ただ発表するだけでなく、その分野に詳しいアドバイザーが付くというのはとても良い企画だなと思いました。

②　先輩がすごいコメントも的確で、発表をしていないけれどとても勉強になりました。また、大学生の方のここ3年間の過ごし方が、すごく充実した生活を送っていて、私も後悔のない4年間を過ごしたいと思いました。

③　大学生の司会進行がすごかった。部活動の先輩で前から関わりがあったが、今日再び凄さを感じた。自分が3年後に先輩のようになっているか不安になる程素晴らしかった。

④　英文学を学んでいる先輩が来てくださっていたので、作品分析における重要なポイントや基本的な考え方などを聞けて参考になった。

⑤　私が知らないことを自分の経験から深く述べていただき、私自身新たな疑問を抱き、より自分の論を深めて行きたいと思いました。それを深めればより実践的なものになると思います。大学生の方々は、どのテーマでも私たちに事例などもからめてアドバイスしていただき、皆さんやはりその引き出しが広いのだと改めてすごさを感じました。私も、もう大学生になるのでこれからは自分の気になることだけでなく世の中の出来事を広く知っていきたいと思います。

⑥　2限(分科会)の発表後のアドバイスを事前に読んで考えてくださっていてとても嬉しかった。

⑦　私の発表が終わったあとよかった点、論文をより良くするためのアドバイスをいただけてとても嬉しかったです。論文を書くのを頑張って良かったと思えました。

【その他、発表会全体を振り返って】

①　中間発表の時より論文がまとまったのでプレゼンもしっかりとできた。質問された時にまだ改善点があったなと思った。この時期に発表会があるのは良いと思う。

②　半年以上かけて何度も練り直しを重ねて執筆してきた卒業論文の総決算のようで、大変だったと同時に達成感を感じられた一日だった。

③　様々な分野について各自違う分析装置を用いて考えていて面白かったので、私も様々な事柄について色んな視点から考えていきたいと思いました。

④　大学へ行く前にこのような機会があったことはとても良かったです。改めてこの学校で学ぶことができて良かったなと思いました。今後、大学へ進学してからも活かしていけるようにしたいです。とても楽しかったです。

⑤　周りと自分の表現力・思考力の差を実感しました。特に、体育館で発表した3名の論文は具体的、現実的で私も大学での論文執筆の時はもう少しその要素を意識したいと思いました。他クラスとの論文の共有は初めてで新鮮でした。同じ分野でも、根拠の使い方や結論への繋げ方が全く異なるので、自

分もこの根拠使いたかった、とか、逆にその根拠をなんで見つけられたのか知りたい、とか、論文の質問よりも根拠の引用の仕方を教えて欲しかったほどです。教室での発表を含め代表者の発表は刺激的でした。59期生以降もぜひ続けてほしいです。

Ⅳ　今後に向けての課題

生徒の感想から伺えるように、本企画の実施は概ね成功だったと言えるであろう。今後の継続実施に向け、今回見えた課題をここに挙げたい。

(1)　発表準備の時間確保

従来の「論文」の授業では、11月に完成稿を提出した後の2学期の授業内では、『要旨集成』の冊子に掲載する600字程度の作文を仕上げていた。今回、発表会が入ったため、プレゼン用のスライドと発表原稿作りという新たな作業が加わり、冬休みの宿題が増えることとなった。実際に発表してみて、スライドをもっと考えて作った方がよかった、7分で喋れるよう練習をする必要があった、等の声もあった。生徒が安心して発表できるよう、発表準備の時間をもう少し確保すべきであった。

(2)　急な欠席者の対応

コロナ感染およびインフル流行が収まらない状況下であり、当然急な欠席者も複数いた。グループ内発表の際、1人欠席が出ると10分間空いてしまう。3人グループになったところは、そのまま時間を持て余してしまったケースもあったようなので、最後の時間は他の班の発表を聞きに行くように言う等、指示を徹底するとよかった。

(3)　スライド作成ツールの統一

分科会での発表の際、教員のパソコンをプロジェクターに繋いで発表者のスライドを投影したが、PowerPointで作成した生徒はパソコンにPower Pointが入っていないため、PDFに変換したものを映すしかなく、せっかく作ったアニメーションが反映されない等のトラブルがあった。来年度は作

成ツールをGoogleスライドに統一しておけば、同様のトラブルがなくなるであろう。なお再来年度以降は、生徒が自身のChromebook（※今年度以降、1人1台所有）をプロジェクターに繋げられるため、このような問題は起きなくなることが見込まれる。

(4)　協力してくれる卒業生の確保

１月の第2週目は大学で後期の授業も始まっており、テストを行う科目も少なくないという。さらに3年生は就職活動やインターンシップも頻繁に入るようだ。大学生にとっては何かと忙しい時期であったが、幸いにも今回は16名の卒業生が協力してくれた。幸い、予定通り誰一人欠けることなく来てくれ、滞りなく会を進行できたが、もし急な欠席になった場合、分科会は教員を補填する必要があるだろう。だが、生徒にとっては教員より大学生と接した方が格段に楽しいに決まっている。どのような事態になろうとも、今後もなるべく大学生を確保したいところである。また、本校の卒業論文は作品分析型の論文が多いのが特徴なのだが、大学でも作品分析に取り組む学生はなかなかいない（文学部の国文学専攻や英米文学専攻等に限られてしまう）。学部学科に拘らず、作品分析に興味関心が深い大学生に、今後もご協力をいただけるようにしたい。

Ⅴ　おわりに

このような発表会が成立したのも、ひとえに後期試験や就職活動等多忙の中、都合を付けて来校・協力してくれた卒業生のおかげである。今回の企画の意図を伝えたところ、口々に「前もって発表者の論文を読んでおきたい」と言い、年始早々丁寧に後輩の論文に目を通してくれた。会を終えて、卒業生からは、「大学生の視点から見ても良い機会であるなと思います」「テーマ設定が独創的で、着眼点がユニークであり、研究の質も高く、私自身多くの学びがありました」「非常にハイレベルでワクワクしながら発表を聞くことができました」「どの発表もとても興味深く、勉強になりました。特に体育館での発表は素晴らし

く、行動経済学等の分析の手法が自分の研究テーマとも近く面白かったです」「とても良い企画なので、自分が卒業するまで毎年声を掛けて下さい」という声が寄せられた。本校の教育活動にいつも快く協力し、意欲的に関わってくれる卒業生には心より感謝申し上げる次第である。

本校では毎年、６月のLHRで「ようこそ卒業生」という企画を設け、大学生活について後輩に語るホームカミングデーを実施しているが、この卒業論文発表会も、第二のホームカミングデーとして定着させても良いであろう。生徒の多くが大学進学を控えたこの時期に、現役の大学生がどのように研究に取り組んでいるのか、自分達の論文にどのようにコメントするのか、直に知れる体験は大いに貴重である。今後も、「探究」的な学びの集大成の一日として、また高校生・大学生が相互に良い影響を与え合う場として設定していけるよう、実施の継続を図っていきたい。